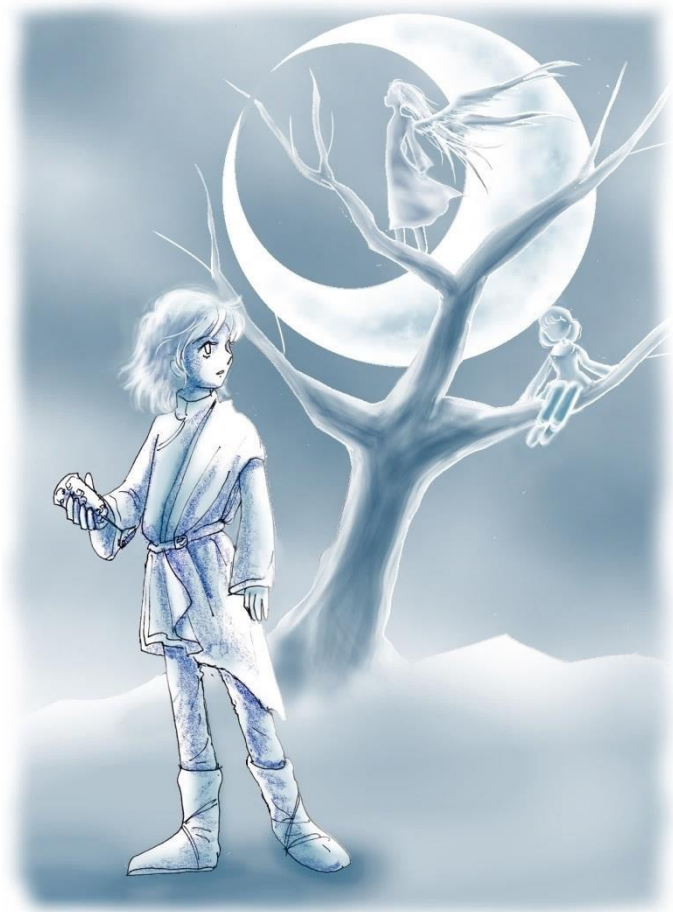


風の末裔シリーズ・3rdシーズンの1
～月の子星の子～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>



夕暮れの草原を風が渡る。

夕陽の色に染まりながら駆けるのは、この国には珍しい、連銭(れんせん)美しい葦毛馬。馬上はこれまた、この国には珍しい淡栗毛の少年。

夕陽を浴びて赤く染まる前髪の下の瞳は、冬空の薄い青。はなだ色…ともいえる色。外国とつくづくよりの旅人かと思いきや、れっきとしたこの国の王族の一員。

通い慣れた草原台地の最後の一つを越えて、馬の脚を緩めると、眼前に寂れた古い街が広がる。昔王都だった時代は立派な城壁に囲まれ門もあったが、今は簡単な関があるだけで、それも形だけだ。

大分昔に都はもう少し南東…大陸寄りに遷都された。それに伴い王族も、この古い街を出て新しい都に移り住む。一部の『物好き』を除いて…。

昔の城跡は傾いてひび割れ、廃虚といっても過言ではない。葦毛の騎馬は、水の枯れて久しい噴水広場を通過して、壁が剥がれた細い路地に入った。

昔の後宮の跡地に、そこだけ小綺麗な塀に囲まれた一角がある。塀の途切れた所に門があり、下馬してそれをくぐると、野バラの垣根が野放図に広がる。奥の陽当たりの良い芝生に数

本の蜜柑の太木が立ち、丁度白い花が真っ盛りだ。

夕陽に染まる花の下、揺り椅子の人影が、垣根を揺らして近寄る来訪者に気付いて立ち上がった。

「まあ、シリギ殿……。またこんな片田舎まで。お母上に許しを頂いて来たのですか？」

少年と同じ淡栗毛を長く結った品の良い老婦人。言いながらも、気に入りの孫の来訪に嬉し気だ。

「手紙を置いて来た。大丈夫だよ。僕がいなくなっても、兄様達がいれば」

「またそんな……」

子や孫は数いるけれど、異国の血を引く祖母の髪の色を受け取ったのは、長子の所のこの四男坊だけだった。

しかし祖母が、特別にこの子供を気に掛けるのは、その為だけではない。

少年は馬を庭園の隅に繋ぐのももどかしく、祖母に駆け寄りて堰を切って喋り出した。

「ソルカお祖母様、またなんだ！ また、おかしな事があったんだ！ 僕には見えているのに、他の誰にも見えないんだ！」

「……………」

老婦人は肩を落として溜め息を付いた。

少年の手を引いて庭に設えられた丸テーブルの椅子に座らせ、ただ一人の侍女を呼んで飲み物を運ばせる。

「シリギ殿、昔から言っていますよね。見えないのが当たり前なんです。見えない人達の中で普通に過ごすには、普通ではない部分は口に出さぬべきだと」

「なんでっ？」

少年は薄青の瞳を見開いて婦人に迫る。

「そこにいるのに、見えているのに。蒼い髪のヒトが草の馬に乗って空を駆けるのが！」

「シリギ殿……」

「お祖母様だけが信じてくれた。昔から。馬鹿な事言ってるんじゃないって叱らなかつた。ソルカお祖母様は僕の味方でしょう。ねえ、教えて、何で僕にだけ見えるの？ あの蒼い髪のヒト達、何なの？」

婦人は今一度溜め息を付き、すぐるような目の少年に向き直った。

「貴方、幾つになりました？」

「先月十二になりました、お祖母様」

「そう……来年には私がこの街に来た歳ですね」

婦人は白い花が清く香る木を見上げた。

「あの時持って来た蜜柑の挿し木がこんなに大きくなったのだ」

から、本当に大昔ね……」

「お祖母様？」

「逢った事があるのですよ、私も。…蒼い髪の妖精」

老婦人は、目を真ん丸に見開く子供の前で、ゆっくり話し始めた。
「遠い昔…淡い記憶……………」

モンゴルの大ハーンの四番目の皇子トルイに着いて、王都へ来て間もなくの事。他言ならぬと前置きして教えられた皇子の出自。

庭で根付いた蜜柑の苗の一本を持って、西の森へ誘われた。

皇子は黒鹿毛、自分は尾花栗毛に乗って。

「俺の血を分けた母親、ソル力には逢っというて貰いたい」

「えっ？」

王は側室の貴卑(きひ)はあまり問わないのに、何故かこの第四皇子だけは母親を名乗らせず、正妃の子に納めていた。

だが、どう見たって正妃の子ではない、いや、それどころか、人間離れたものを感じる…というのは、口に出せない大方の見解だった。

皇子は何も言わず、西の森の慣れた道を分け入った。後宮でもなく、こんな郊外の森の中に住まわせているなんて…。ソル

力は胸のザワ付きをpushしながら、黙って着いて行く。

森の中心に少しの広場があり、古い小さなバオがあった。トルイは下馬してバオに駆け寄り、声を掛ける。

「狼、ソル力を連れて来たよ。姿を見せて」

「オオカミ……？」

ソル力はトンでもない事を想像して、胸のドキドキがパンクしそうになった。村へ来た時、狼の化身を名乗ったトルイ。真っ赤な髪、銀の目に大きな犬歯…。まさかまさか？

でも王に、『隠していた事実を驚愕する日が来ても、信頼は揺らがないか？』と問われていた。そうだ、自分で決めたんだ。このヒトが何から生まれていようと、受け入れよう。

そんな健気な決意の女の子の前に現れたのは、蒼い髪の透けるように白い女性だった。

現れた…と言うのがびったりだった。いつの間にか数歩離れた木漏れ日の中に立っていて、ソル力に正面向いて優しく微笑んだ。

人間とは違う…風と大地の妖精だという事。本当は人間の眼には映らないが、トルイと生涯共にいるソル力には、逢って名乗りを挙げようと思った事。空飛ぶ草の馬を駆り、王と戦を共にしている事…等を教えて貰った。

ソル力の持参した蜜柑の木の苗をとても喜んで、別れ際、二

人の額に手を当てて、気の早い祝福をしてくれた。

それから程なく、その第四皇子の求婚を受け、王室に入った。

トルイは多くの子を設けたが、何故か蒼の妖精を見る事の出来る子供は誰もいなかった。

「もう必要ないのかもしれない。そういう能力も、妖精との関わりも」

そう言っていたトルイが没して、忘れた頃に生まれたのが…。

「シリギ殿、貴方なのです」

「……………」

少年は初めて聞く話にくらくらしていた。

「じゃあ…、お祖父様は、妖精がお母さんなの？ だから僕

にも妖精が見えるの？」

「そうね。貴方のその瞳の色は、あの方とまったく同じ…」

「じゃあ僕、間違っていないかったんだ。おかしな子じゃないん

だ。ねえ、それ、みんなにも言ってみてよ」

婦人は少年を覗き込んで、静かに首を振った。

「ね、シリギ殿。今、貴方にこのお話をしたのは、解って賣える歳になったと思ったからです」

「解る？ 何を？ 馬鹿にされても我慢して、見えない振りし

ている方が賢いって事?！」

「違います、シリギ殿」

婦人は殊更はつきり少年に正面に向けて座り直した。

「お祖父様が妖精と繋がりがあったのは、必要だったからです。

その父上、モンゴル王朝の始祖テムジン殿が、大陸を平定するのに、人外と通じる事が必要だったと。だから、時を経て貴方

にその力が現れたのは、やはりこれからどこかで、それが必要になるのですよ」

「……………!!」

突然話が大きくなったのに、少年は口をぽかんと開けた。

「その話…じゃあ、尚更、父上や叔父上達に言うべきじゃ…」

「シリギ殿、トルイお祖父様が、何故それを、ご兄弟や親族に公にしなかったか、解って賣える歳になったと思ったから、お

話したのですよ。お祖父様はテムジン殿の為に生まれて来た。

決してご自身が表に出る為ではなく、ただ役立つ為だけに生まれて来て、その勤めを一生懸命果たそうとなされた」

そこまで一気に話して、祖母は一息入れ、噛み締めるように

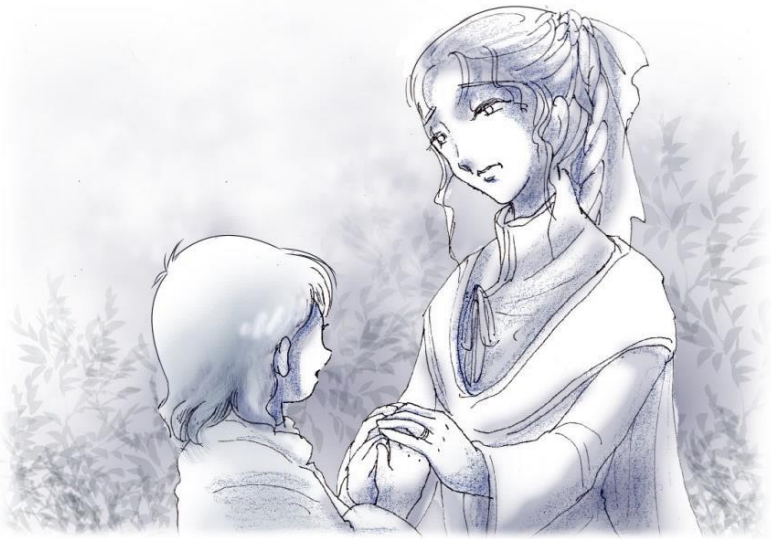
ゆっくり言った。

「でも…、周囲はそう思ってくれなかった…という事です」

「……………」

「貴方も、多分、そういう存在になるのです」

「……………」



「貴方がお祖父様の資質を受け継いでいるという事、迂闊に他言してはなりません」

「……………」

少年は言葉を送切れさせ、陽はとくに沈んでいた。

「今夜は泊まって行きなさい。蜜柑の蜂蜜漬けがありますよ」
カンテラを灯し室内へ誘いさなう祖母に、少年はやっと言葉を発した。

「その、狼ってヒト…まだいるの？ 僕、会いたい」

祖母は静かに首を振る。

「私も、直接逢ったのはあの時一度だけでした。お祖父様が亡くなった後、何度か西の森へ行ってみたけれど、気配がまったく無くなっていったの。妖精は人間より遥か長く生きるといって、役目を終えて帰るべき所へ帰ったのかも…と、思ったわ」

「……………」

「今は静かに待つべきだと思いますよ。きっとその力、役立てる時が来ます」

「お祖母様…本当に、そう思っている？」

子供は丸テーブルから動かず、俯うつむいたまま低い声で呟いた。

「……………あの噂……………本当なの？」

老婦人は硬直して立ち止まる。

「お祖父様が……毒を飲まされたって……ご自身の兄弟に……」
「シリギ殿！」
「だからお祖母様も、一族から離れて、こんな所で隠生しているんでしょっ?！」

少年は踵きびすを返して夜闇へ駆け出した。

老婦人の呼び止める声を背中に、シリギはあっと言う間に馬を連れて庭を横切り、門を飛び出した。

乗馬して、僅かな明かりの灯る街を駆け抜ける。鬨を抜け、星が散らばる暮れたばかりの草原を走って、西の森を目指した。

祖父トルイは、一族の中でもずば抜けた存在だったと聞く。戦の戦略にしても剣の強さにしても人間離れしていて、何よりの不思議な魅力が多くの人望を集めていたと。ハーンへの即位の勧めも持ち上がったが、辞退して一将に徹し、兄達を助ける役割に回ったという。

その一将は、兄王との遠征先で、若くして急逝した。王都に居たソルカ妃には、病死だと以外は何も知らされなかった。

祖母が古い都に住み続けるのは、蜜柑の木の元に居たいという理由だが、王族との間に心置けない隔たりがある……って空気は、幼いシリギにも感じ取れていた。

街外れの、訪れる者もない荒れた森。

過去トルイ皇子が通った道も完全に埋もれ、僅かな月明かりでは先行きも見えない。当然、葦毛は嫌がった。

「この弱虫！」

シリギは馬に毒付いて自分を奮い立たせ、下馬して馬を繋ぐと、一人で森へ分け行つた。下生えに足を取られ、枝に頭をぶつけながら森の中心を目指す。

何度か迷った末、やっと古いボロボロのパオの立つ広場にたどり着いた。お祖母様の話は本当だった。

パオは完全に朽ちて傾き、とても誰かが住んでいる雰囲気ではない。辺りも草ぼうぼうだが、その中に一本だけ立派な蜜柑の木が立っている。庭園の木と同じに、白い花が月明かりに満開だ。

「オ・オ・カ・ミ……?」

シリギはそおっと呟く。

「狼……、いるなら、教えて。トルイお祖父様は、能力を妬まれて、兄弟の手に掛かったの? 同じ能力を持つ僕は、何の為に生まれて来たの?」

声は森の木々に吸い込まれて、ただ消えて行った。

「……………」

シリギは自分のしている事の馬鹿馬鹿しさにうんざりした。

お祖母様の所へ戻ろう。心配している事だろう。少なくともあのヒトは間違ひなく自分の味方だ。

ざわわ………蜜柑の木が大きく揺れ、月明かりが強くなった。

「…?!」

月明かりじゃない？ なに、この光？

次の瞬間、眩しい光の中に出て来たシリギの影が、ギョーンと伸びて立ち上がった。

「わ?? わわ!!」

影は真つ赤な口を開け、耳が生え手足が伸び、たちまち大きな黒虎となる。

「な、な、な……?!」

シリギは腰を抜かしてへたり込んだ。黒虎は子供をギロリと睨み付け、熱い息を吐きながら迫って来る。

夢なのか?! 違う、この息の生臭さ……本物に間違ひない。僕の人生、こんなに短く終わるの?!

——瞬間の出来事——

虎が飛び掛かると同時に、蜜柑の木のとっぺんから緑の閃光が飛んだ。

シリギは固くつぶっていた目を開けた。その目に映るのは、地面に刺さった緑に光る槍と、それに貼り付いたように動きを止められた虎。

「…や、槍……? 誰が?!」

腰が抜けて立てず、ズリズリと這って虎から逃れながら、木の上に目を凝らしてみた。何かぼろっと光っているが、よく分からぬ。

「…なあんだ……」

棒読みの声が静かに響いた。

「キビタキと同じ能力って自分で言うから……、楽しみにしたのに、期待ハズレ……」

「だっ、だれっ? 誰なの?!」

シリギの問い掛けには答えず、無感情な声は、別の誰かに話し掛けた。

「もう、いいよ……。ユユ、やっちゃって」

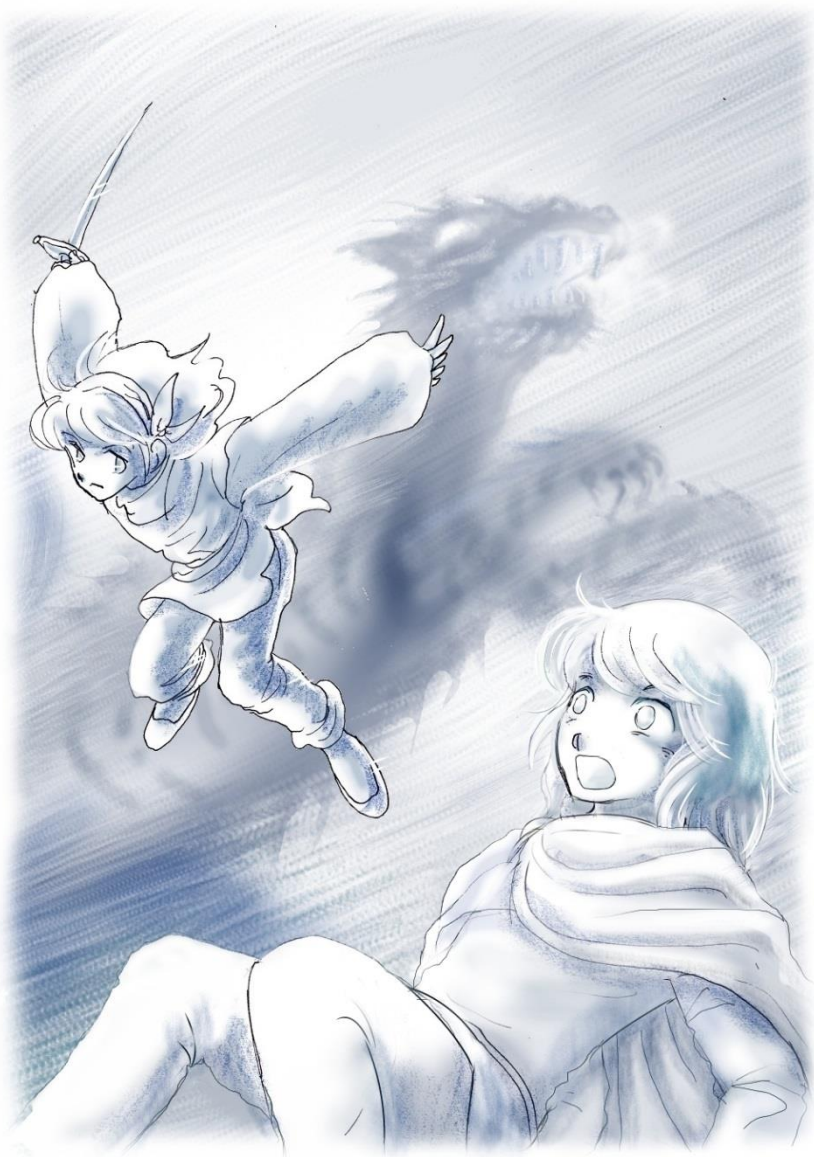
「はあい」

蜜柑の木のとっぺんがバウンドすると同時に虎が動き出し、シリギの目の前にいきなり何かが飛び降りて来た。

「——破邪——!!!」

目も眩むような翡翠色の光が広がる。

シリギがようよう目を開けると、小さな人影が細剣を掲げて



片足を軽く上げ、クルリと回って、目の前に着地した。細い足首が妙に白かった。一拍遅れて、黒虎の破片が力サカサと舞い散る。

びっくりして言葉が何も出なかった。黒虎を倒したであろう白い足首の主は、自分と同じ歳位の女の子だった。肩に掛かる蒼い巻き毛、そして自分と同じ、はなだ色の瞳…。

女の子は剣を降ろし、両膝に手を添えてシリギを覗き込んだ。

「あんだ、大丈夫？」

「ユユ！」

樹上の声が答める。

「お気軽に人間に関わるんじゃない。帰るぞ」

「はあい」

女の子は剣を腰に差して、ボンと地面を蹴る。

シリギはバネで弾かれたみたいに跳ね起きた。折角巡り逢った千載一遇の機会！お祖父様の死の噂…、自分の運命…、蒼い髪のヒトなら何か教えてくれるに違いない！

シリギはふわりと浮かんだ女の子に、ガッシリ飛び付いた。

女の子はそこまでされると思わなかったんだろう。完全に油断していて、シリギと共に地面に転がった。

「ぎゃああ!! 何すんのよ?!」

「お願いっ、行かないでっ!!」

もがく女の子を、決して離すものかと必死にしがみ着く少年の眼前に、ザクリと緑の槍が突き刺さった。

「ひっ…!」

そお…と見上げるシリギの眼に、眉間に怒りを滲ませた男のヒトが映った。吸い込まれるような水色の瞳、同じく水色の長い髪、月光に煌めく…薄蒼の羽根…!

「ユユから…:は・な・れ・ろ!!」

女の子はシリギの腕から逃れて、そのヒトに駆け寄った。

「迂闊だな、ユユ…減点…」

「ごめんなさい」

二人がまた去ってしまいそうなので、シリギは必死で叫んだ。

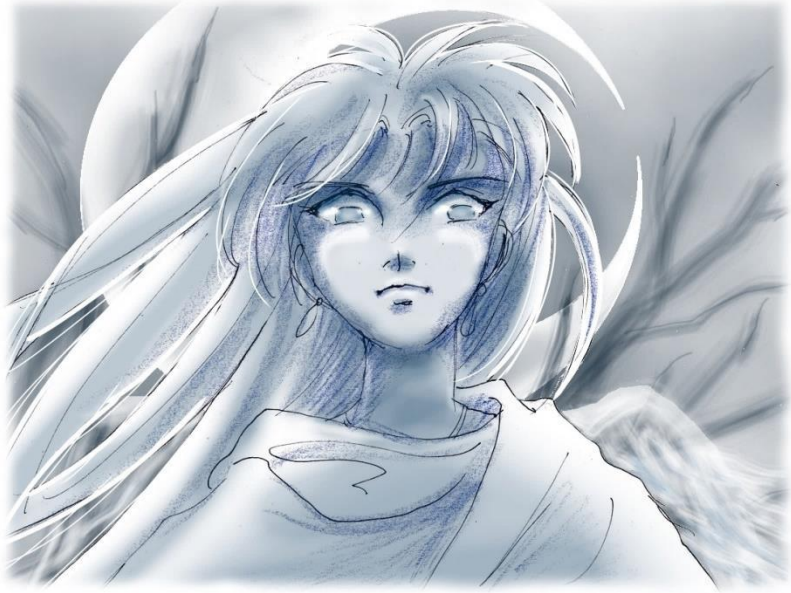
「お願い!! 教えて!! 僕に貴方達が見えるって事は、お祖父様と同じに、一族の役に立たなきゃならないの? でも散々利用された挙句、妬まれて殺されたんじゃない、割に合わな…」

最後まで言い終わる前に、シリギの眉間に槍の切っ先がピタリと止まった。

「…キヒタキを…侮辱する・な!!」

羽根のヒトは目を大きく見開いて、凄味のある三白眼でシリギを睨んだ。その怒りの表情に、思わず背筋が縮み上がった。

「……………」



シリギは言葉に詰まった。

黙っていたらこの二人は去ってしまう。でも何か喋るとこのヒトの怒りを買う。どうしたらいいんだ？

さっきから二人を見比べてキョンとしていた女の子が、決心したように口を開いた。

「ね、カワセミ様。ほんの少し、このヒトを助けてあげてほしいかしら？ だってこのヒト、アタシの血縁でもあるのよ」

羽根のヒトは、女の子の申し出にも気持ち動かされる気配はなかった。

「ユユ、修行中の身でヒトの心配なんかしている暇があるか？ 先に入行ってろ」

折角手を差し伸べてくれようとした女の子は、木の上へ追いやられてしまった。

カワセミと呼ばれた有翼の妖精は、自身も去りかけながら、地面に転がったまま憔悴とする少年を見下ろした。

「テムジンだって、キヒタキだって、…巫女だって…、誰にも頼らず、自分で考えて道を切り開いたんだ。人外が見えるっ位で狼狽するんじゃない!!」

無表情にそう言い放つと、羽根を広げて真上に飛び立った。

シリギにはもう引き留める勇気はなかった。

その直後、森の木々の中に足音と気配がした。息を切らして、カンテラを掲げたソルカ妃。

「よかった、いてくれた！ シリギ殿！」

カンテラを地面に置くと、転がっている子供に駆け寄り、しっかりと抱き締める。

「ああ、こんなに泥だらけ。怪我はないですか？」
そして、子供の肩を支えてその頬を撫でた。

「私が悪かったわ。貴方には、まだ早い話だったのね。もう忘れなさい、気に病まなくていいのよ。何があっても、私が貴方を護りますからね」

祖母の手の甲は、森をくぐって擦り傷だらけだった。それを見て、混乱した頭の中から、思わず一つの言葉が出た。

「ううん、ごめんなさい、お祖母様。僕に何かの力があるのなら、本当は僕がお祖母様を護らなきゃならないんだ！」

言ってから気付いた。自分で考えるって、もしかしたらこういう事なのか？

木の上で、立ち去らない師を、ユウは黙って見つめていた。

「…ユウ」

「はこ」

「一週間、修行はお休み」

「…はこ」

「あの子の助けになってやれ」

「はい…、でも、どうして？」

羽根の妖精の水色の瞳は、子供を伴って森を歩く老婦人を映っていた。

「巫女の馬の、恩人だ……」

森の外、祖母の乗って来た馬は、茸毛の隣に繋がれていた。美しい尾花栗毛のこの馬は、トルイと出逢ったあの日、ソルカが救った牝馬の子孫だ。

その後、トルイの姉の愛馬だという尾花栗毛は、結局主の元には戻らず、何故かソルカに譲られた。トルイに問うたら、

「あのヒト、もう現世(うつよ)に戻るつもりがないから…」
と、寂しそうに言うから、ソルカもそれ以上は聞かなかった。

月の下、並んで歩く祖母と孫の二騎。

先程からソルカは請われるままに、初めてトルイと逢った日の事から順に話している。殆どヒトに喋った事のない話まで、つらつらと自然に口をついて出た。

トルイが剣を掲げて雷を呼んだ事、風の神の告知を受けてソルカの村を救った事、人間離れした事でも、シリギがあまり驚

かず、自然に受け取っているからかもしれない。

月に照らされる横顔も何だか違う。この数時間でこの子に何かあったのだろうか？

ひとしきり話し終わった後、今度はシリギが聞いて来た。

「お祖父様の母君にも、蒼い髪の親族がいるんだろうね」

「??」 ええ、そうでしょうね……」

「じゃあ、僕にも、妖精の親戚がいる……って事だね」

「ええ、そこかもしれないですね。……いきなり、どうしたんですか？」

唐突な話題に不思議がる祖母に、少年は小さい声で呟く。

「逢ったんだ、さっき……」

「え……」

「何でもない」

本当に何でもない事だ。ただ自分には、人間の家族の他にも、ホンのちよっぴりでも、血縁と想ってくれている存在がある。

その事が、妙に少年に勇気を与えたのだった。

自分がどうして今更この能力を持って生まれたのか？ 本当

に祖母の言う通り、大いなる力が働いて、必要になるから授かったのか？ それならば、自分はこれから何をすべきなの？

何もしないで今まで通りの生きても道もある。その方が簡単に楽だろう。でも……。シリギはあの月明かりの下、羽根の妖精の

怒りに満ちた表情を思い出す。自分はきつと、何か大切な事を知らないんだ。知っていないさやいけない、とても大切な事を。

シリギはだから、まずはトルイを『知る』事から始めようと思った。知って初めて、自分の本当に進むべき道が見えるのだと。

トルイは、テムジン亡き後、自分の立ち位置をどのように定めていたのだろうか？ 一族の中で、どのように振る舞っていたのだろうか？ 自立できないように隠れていたら、一族の役に立たない。父や叔父達に聞く彼の話は、晴れがましい武勇伝ばかり。

その結果、本当に噂通り……？

二十年も昔の事、一族の中で聞いて回るのは愚かだ。

しかし当時のトルイの近くには、…遠征には、人の目に見えず、母であり戦士である蒼い狼も着いて行った筈だ。

漠然とやるべき事が見えて来た。

蒼い狼を探して…逢ったんだ!!。

手掛かりは、祖母が一度だけ逢った時の、狼との話の中の僅かなヒント。トルイが領主を務めていた北の草原に、妖精の住む里があると言っ。そこを目指してみよう。

血縁がいるのなら、きつと蒼い狼を知る者もいる筈だ。幸い自分には妖精が見える。見つけたら力の限り追い掛ければいい。

「お祖母様」

「なあに？」

改まった孫に、ソル力は優しく答える。

「帰ったら、母に手紙を書きます」

「ふっ」

「暫くお祖母様の所でゆっくりになると」

「えっ？ それはいいですけど」

「僕、行きたい所があるんです。明日早くに出発します」

「お母上に嘘をつくのですか？」

「お祖母様は知らない事にしていて下さい。僕、自分で考えて、行くべき道を切り開きたいんです」

「……………」

「すみません…」

「……………」分かりました。でも、決して無理はしないで下さいね」

頑固で思い詰める所は、ちょっとあのヒトを思い出させる。

祖母は尾花栗毛の背で、その日三度目の溜め息を付いた。

初夏の緑の中に、黄色い花が帯のように広がっている。

北の草原の台地。

灌木の林の中に、シリギの淡栗毛がのぞく。隠れているつもりで、上空からは丸見えなんだが。

「昨日の風からずっとここで張っている。確かに妖精の里は近いだろう。日に何度も、空に草の馬を見かける。その度に草毛を駆って追い掛けるんだが、どうしても途中でフイと見えなくなる。」

人間には近寄れない世界なんだろうつか？ いや、こんなにとことと掛けちゃダメだ。

「手掛かりを掴むまで幾らでも粘ってやる」

「そんなに粘られても困るんだけれど…」

「こちらはシリギの後方の落葉松のてっぺん。二つの小さな人影があった。」

「カワセ三長が、あの子供の件は「」に任しているから手を出すな……って言っているもんで、追い払う事も出来なくて苦情が殺到しているんだ。目障りだって」

「……………」

「どうせあの子は妖精が見えるんだから、手っ取り早くお前が行って、知りたいことを教えて来てやればいいだけだろう。」

一人は先日の女の子。もう一人は同年代の男の子だ。

「でもね、ナナ…。はいどうやって答えを貰う事を、あの子は望んでいるのかしら？ ううん、あの子は言葉で言う答えじゃなくて、もっと別のモノを欲しがっているのよ」

「そんな悠長な事言ったら、カワセミ長に貰った一週間の猶予なんてあつたという間だぞ」

「……………」

「僕はもう行くぞ。大長に呼ばれているんだ」

「待って、ナナ!」

「ユユは何か思い付いて、空中の馬を呼ぼうとした兄を止めた。

「そう、差しあたつてあの子が欲しいのは、自力で何とかする……って達成感よ。アタシが何か助けをするにしても、あの子にはそれを受け取る理由が要するの」

「……………」

「ナナはイヤ……な予感がしながら、一応聞いた。妹がこういう理屈をこね出す時は、口くでもない事に巻き込まれる可能性大なのだ。

「恩を売らせてあげりゃあいいのよ。例えば、か弱い女の子が悪漢に襲われている所を助ける……とか」

「……………」

「待ちなさいよ、ナナだつてチヨイと作れば悪者らしくなれるわ」

「そんな下品な事出来るか! 離せ!」

「健気で可愛い妹がこんなに頼んでんのに!」

「そんな代物、何処にいるんだ?! はーなーせー!!」

二人はもつれ合つて落葉松の枝から足を踏み外した。

「わっ!!」

「キャ!!」

風の妖精なら勿論その位平気だ。ましてや、この二人は風に乗るのは得意技だ。

落ちながら二人は、同時に風を呼んだ。そしてそれは丁度逆方向同士から来て、二人の身体の上でキレイに相殺された。この双子は、時々こういう天文学的確率のドジをやらかす。

「ユユ、このバカ……!!」

「ぎゃああああ……!!」

——ばきばきばきばき……どさ!!……

落葉松の木の根元でもつれ合つてノビている三人……………さん? ……さん? ……さん? ……さん?

木の上で揉めていた二人は、地上の少年にとっくに気付かれていた。そして話し声を辿つて木の根元に来た少年は、見事に枝を突き破つて落つちて来た二人の下敷きになった。

「うう………」

シリギは意識を取り戻した。頭がスクンスクンする。

「あ、あ、あ、…まだ動いちゃ駄目ですよ。頭をぶつけていますからね。もちよつと、じっとして下さいね……」

柔らかな声の主を確かめる間もなく、額と目に誰かの手が被さった。その暖かい手が触った所から、痛みがスウツとひいて行く。

どうやら地面の柔らかい草の上に寝かされているようだが、周囲に何人かの気配を感じた。

「ユコがバカな事言い出すから……」

「うう……ごめん……でも、ナナだって」

さつき樹上で揉めていた二人の子供の声。

「だってアサツテもない！ キミら二人おかしな力が働いて、ボクにも予知出来ない危険が起ころんだ。二人同時に魔法を使わなくては行かない！」

これは……、この間西の森で会った羽根のヒトだ。……確か、カワセミ様……って……!!

シリギは一つの事を思い出した。仰向けで目を塞がれたまま声を出す。

「……あの……」

一同、黙ってシンとなった。

「お祖母様に聞いた。昔、村を救ったトルイお祖父様を大王が誉めたら、『カワセミのお陰です』って言ったって。あなた、その……カワセミさん……なの？」「……」

一同黙っている。目を塞がれているので、表情が見えない。

「……だったら、どうなの？」

つつけんとんカワセミの声。

「お礼、言いたい」

「村を救ってくれて有難うって？」

「お祖母様を、助けてくれてありがとう」

「……」

また静かになった。

ふ……と目を塞いでいた掌が退いた。頭の痛みはもうない。そして周囲には誰も居なかった。今しがたまであんなに何人もの気配がしていたのに。

シリギは上半身起こした。

「痛……!!」

右足を見ると、ズボンがまくり上げられ、ふくらはぎから足首にかけて、布がしっかり巻かれている。何の膏薬を塗ってくれたのか、凄い臭いだ。

「挫いたのか？」

踏まれたり蹴られたりだ。折角、蒼い妖精らしき人達に逢えたのに、何も聞かず、見当違いな事のお礼を言っただけ。

背後で吐息がして、慌てて振り向いたが、自分の馬だった。がっかりしながらも、自分を気遣ってくれる茸毛の鼻面を撫で

てやる。

妖精は人間が嫌いなのか？ いや、そうは思えない。優しい手だった。関わりを持ちたくないだけなんだろっか？

そんな事を考えながら葦毛を見て、ある一点に釘付けになった。灰色の連銭模様の首の付け根に革ひもが掛けられ、見覚えのない金の鈴が付いている。

シリギは葦毛の肩に掴まって立ち上がり、その鈴を間近で見た。子供の拳ほどの大きさで、燦（いび）し金に細かい不思議な模様が彫り込まれている。

「お前、これ、どうしたの？」

馬はいつもと変わらないまばたきをしながら主を見る。そして前掻きをして身体を前後に揺すった。

「乗るの？ お前、もしかして、『行き先』を『教わった』の?！」

葦毛はまるで顔（うなず）く（め）つに首を上下に振るった。

葦毛は文字通り飛びように駆けた。一步が普通の馬より遙かに大きく、景色が流れるように過ぎて行く。

馬上のシリギは心踊らせながらその飛翔感を楽しんでた。

鈴の音がチリチリ響き、馬の四肢に意思を伝えて何処かへ導いているようだ。

「何か教えてくれる、誰かの所へ連れてくれるのかしら？」

何時間が駆けて辿り着いた所は、しかしシリギの期待を満たしてはくれなかった。

「……………」

葦毛が止まって一步も動かなくなった場所は、周囲に人家もない荒地地だった。草原の外れの国境近く、すぐそこに青々と連なる山脈の向こうは、もう隣国だ。

「お前、本当に、ここでもいいの？」

葦毛は真っ黒い目でシリギを見つめ、フルルと唸る。こいつが喋れたらいいのに……。

もう夕暮れで、じき真っ暗になる。シリギは決意した。足を引きずりながら、白蟻化した木切れを集めて焚き火を作り、馬が止まったその場所に座り込んだ。

何のヒントもない。この場所に導かれたという事実だけ。ならここに居るだけだ。

細々と焚き火を燃しながら、祖母が持たせてくれた干餅をかじる。誰が来る訳でもなし、何が起こる訳でもなし……。

「……まさか……」

嫌な思い付きが頭を過ぎる。

「僕が目障りだから追い払っただけ？」

そう思うと、落ち込みと自己嫌悪がいつぱんに来た。僕、何

をやってるんだろ？ 誰も喜ばない。お祖母様にも心配かけて。

丸くなって地面に転がった。目を閉じて、冷たい地べたが頬に触る。

次の瞬間、目の裏を上から下へ淡い色彩が流れた。意識がガクンと墜ちる。眠りに落ちるのとは違う感じ。

.....

真っ白な天幕の立派なパオの中に居る。粗末な野営をしている筈なのに？

手には葡萄酒の盃。自分はぼおっとそれを眺めている。水面の揺らめきが収まった時、そこに映る自分の顔が見えた。

(!! 僕じゃない!!)

そこにいるのは大人の男のヒトだ。葡萄酒の血みたいな赤紫の中、鋭く光る眼は人間じゃないみたいな銀色だ。

.....

ヒュウツと身体を引っ張られる感じがして、目がパッと開いた。荒野の細い焚き火の前で寝転がる自分がある。

「今……」

何だったんだ？ 夢？ それにしては、リアル過ぎる。あの

男のヒトは、まったく知らない顔じゃない気がする。誰なんだろ？ もう一度……見られるだろうか。頬を地面に付けてみる。

しかしもうあの感覚には入れなかった。

〈……トルイ……！〉

唐突な声に跳ね起きた。いつの間、焚き火の向こうに男のヒトが立っていてこちらを見ている。

「だ、だ、誰?!」

こんな荒野にいきなり現れるなんて、よく考えなくても普通の人間じゃない!

立派なマントと装飾品から身分あるヒトっぽいけれど、表情は土気色で目は落ち窪み、肩が不自然にユラユラ揺れている。

〈トルイ……！ 今回の……金軍を退けたのは、お前の力……お前の功績だと皆が称えるのだ〉

読経を唸るような言葉を発しながら、男性は一步二歩とゆっくりシリギに歩み寄る。シリギは恐怖に硬直した。焚き火に照らされてそのヒトははっきり見えるのに、影が出来ないのだ。

〈お前は どうして大ハーンを辞退したのだ。その埋め合わせに即位させられた俺の気持ちなんて……お前には分からない〉

「……」

〈父上はいつもお前を側に置いていた。お前の言葉を尊重した。

お前は兄弟の中で何もかも独り占めしていたのだ。母上がどんな気持ちでいたか。もう、沢山だ！〉

そのヒトは焚き火の中を進んで躊躇なく炎に足を踏み入れた。

何かが焦げる臭いがするが、男性は表情ひとつ変えず、灰色の手を少年の首に伸ばす。

シリギは痺れたように抵抗出来なかった。喉に触れた手は氷のように冷たく、そこから足先まで悪寒が走った。目の前が真っ暗になる。

次の瞬間、目の裏に翡翠色の閃光。一度経験した光だ。

喉の冷たい手は離れた。

地面に倒れ咳き込む自分がいる。目を上げると、白い二本の足首が見えた。

「君…」

「下がってー!」

シリギに背を向けて庇うように立ち塞がるのは、あの蒼い巻き髪の子。

その向こうには吹っ飛ばされて立ち上がろうともがく、手も足もない灰色の生き物。さっきまでは人間の形だった。

女の子はもう一度細剣を掲げた。

「ヒトの情念を糧に闇に喰食うモノ! 清浄なる風により塵に還れ! —— 破邪——!!」

今一度、翡翠色が辺りを包んだ。

光が治まると、灰色のモノは消えていた。

「…?」

女の子はちょっと首を傾げて、細剣を腰に差した。

「やっつけた…の?」

「…と、思う…」

何だか自信無さ気だが、女の子は気を取り直してシリギに向き直った。両手を胸に当て足先を揃えて「ヨコンとお辞儀する。」

「アタシ、ユコ!」

「あ、ああ…、僕は、シリギ。あの、ありがとう…ユコ」

安心した途端、シリギは脚の痛みで悲鳴を上げて、尻もちを付いた。魔物と対峙している時は痛みなんか感じなかった。

「ああ、そう、かなり捻ってしまったよ。痛い? …」

「わよね」

ユコは屈んで、脚の布を緩めて丁寧に巻き直し始めた。

「あつ、まずは、お礼、だわ」

女の子がいきなり顔を上げたので、初めて間近でその大きな瞳を見た。妖精には有りがちな色なのだろうか? 自分とまったく同じ、冬空みたいな、はなだ色の瞳。

「あのね、アタシもナナも、無傷なの。あんたが下敷きになっ
て衝撃をみんな引き受けてくれたから」

「あ、ああ…そう…」

「ありがとう、ナナの方も、ありがとう」

律儀に二人分の礼を述べる女の子に、シリギは照れて俯いた。ただ、避け損ねて下敷きになっただけなんだけれど。

「みんな…、叔父様も、カワセミ様も、感謝を示したかったけれど、何をすればあなたに『良い』のか分からなかったの」

「そう…なの？」

自分の希望ははっきりしていた筈だが？

「あの、僕、いろいろ教えて貰いたいんだ。トルイの事とか、彼の亡くなった経緯とか」

女の子は真顔で正面向いた。

「分からないの」

「えっ？」

「トルイの最期の事は、誰も知らないの。それにあなたが本当に知らなきゃならない事って何なのか、アタシ達にも分からないの。蒼の里の誰だって、あなたを満足させる答えをあげられないって、長様は言っていたわ」

「……………」

「それで、馬に術の掛かった鈴を持たせたの。今のあなたに一番必要な場所に導くようにして」

「いちばん必要な場所？」

「この何も無さそうな荒地が？」

「ここ、何処なの？」

シリギはこの地に来た時からの疑問をぶつけた。

「えっ…?!」

ユコはちよっと意外な顔をした。

「あなたは分かかってここに来たんだと思ってた！」

「知らないよ。馬が勝手に来たんだもの」

「そっか…」

女の子は肩を落とした。

「あなたが何か思う所があってここへ来たと思っていたから、手出ししちゃういけないと思って待っていたの。でも、あなたはここが何処かも知らなかったのか…」

「うん、知らない。ねえ教えてよ。ここ、何処なの？」

女の子は息を吐いて、焚き火の向こうを見据えたまま答えた。

「二十年前、峰向ここの金軍を退けたトルイの軍が、オニデイの軍と合流した野営地…」

「それって…」

「トルイの最後の土地」

女の子はシリギが座り込んでいる場所を指差す。

「そこ、トルイの亡くなった天幕があった場所なの」

「えっええっ!!」

シリギは飛び上がったが、脚をユコに押さえられていた。

「動いちゃダメよ」

二十年前の事だ。痕跡なんかある筈もない。

「こここの場所を選んだのは、あんた自身だもの。あんたの知りたい事は、きっとここにあるんだと思う。でも、あの魔物に遭う為ではないとは思っつけねど…。はい、出来たわ。おタネお婆さん秘伝の膏藥が効いているから、明日には腫れも引くわよ」

「あ、ありがと…」

シリギが分かったような分からないような顔で茫然としている間に、ユコは散らばった薪を集めて焚き火を組み直した。

「さっきの、灰色の魔物…。何なの？」

「あれは、地霊」

女の子は口に出すのも呪われそうで嫌…という顔で、眉間にシワを寄せて答えてくれた。

「人間の怨みとか嫉みとか、そういう残留した悪い心を芯にして育つの。ヒトの傷付く心も大好物なのよ」

「…誰の心を、芯にしたの？」

「多分、オコテイ王。トルイのすぐ上のお兄さん」

知っている…。テムジンのすぐ後の王位継承者…。自分には大叔父にあたる。

「オコテイは、ずっとあんな風に思っていたの？」

地霊に言われた言葉の一つ一つが鉛のように胸を押し潰す。

「オコテイは立派な王だったと聞いわ。あんたもそう思っているでしょう？」

「…うん…」

「ヒトの心は単純じゃない。誰だっって心の底に沈めた殻がある。地霊はそれをいちいち拾い集めて、あんたを苦しめて取り込みたかったの」

自分と同じ年位の女の子は、随分大人びた事を喋る。妖精は長く生きるというし、本当はずっと年上なんだろうか？

「ね、僕、頼みがあるだけねど」

「…ん…」

ユコは焚き火を弄くりながら首を傾けた。

「蒼の狼に逢わせて欲しい。トルイの事ならそのヒトが詳しく知っているんじゃないの？」

「…」

女の子は、何となくそう言われるのを予測していた風に、俯いて焚き火を突つつかいだした。

「逢えないの？ もしかして、もったくくなられている…とかか？」

「いえ、お元気よ、でも……………」

「……」

「トルイが亡くなった時、狼は側にいなかった……らしいの。だから、あのヒトにも……分らないと思う……。それに……」

「ユコの言葉は途切れ途切れで、妙にためらいがあった。しかし決意したように顔を上げた。

「アタ……アタシは……あまり、会って欲しくないの」

「え……?」

今度はシリギが困惑する。何かいけなかったのか?

「あの……ね……」

女の子も一生懸命伝えようと、言葉を探りながら喋り出した。

「きつとね、蒼の狼には、大切なヒトだったと思うの。トルイ

……、たった一人の息子」

「……うん」

「そのヒトが急に死んじゃった……、人間は妖精より寿命が短い

とはいえ、まだまだ生きると思っていたのに、いきなり死んじ

ゃった……、いなくなった」

「……」

「す……く……く……悲しかったと思うの」

「……」

シリギは、言葉を選びながら丁寧に喋る女の子を、黙って見

つめた。

「蒼の狼は、海の底の貝みたいに、長い長い時間を掛けて少しづつ悲しみを薄れさせて行っただと思うの。狼を大切に思っている周囲のヒトも、静かにそれを助けた。それこそ、砂の一粒一粒を積むように」

「……」

「ねえ、分かるでしょ。あのヒトにトルイの最後の時の「トなんて訊ねたら、その砂をいっぺんに押し流しちゃうの」

シリギは俯うつむいた。

「うん、……そうだね……そうか……」

どんなに長く生きる妖精だって、喪失に哀しむのは人間と一緒……。いや、長く生きる分、哀しみも永く続くのだ。

「ごめん……気が付かなかった」

「ううん、こちらこそ、ごめんなさい。助けて貰ったのに、あなたの望みを聞いてあげられなくて」

「ユコは気持ちを伝える事が出来て、ホツとした。こういつのが苦手なのは、人間も妖精も一緒だ。

「その代わりと言っちゃなんだけど、アタシ、あなたのお手伝いをするわ。ちゃんとお許しも貰って来たから」

「本当?!」

妖精に手伝ってくれると言って貰い、シリギは百人力を得た

気持ちになった。

「ね、君はどんな事が出来るの?」

期待に満ちた顔のシリギに、女の子は申し訳なさそうに上目遣いで言った。

「修行中の半人前なの。あまり期待しないで…」

そして立ち上がって、少し離れた所でしゃがんで、地面に両手を付いた。

『『地の記憶を読む』って方法があるわ』

「チノキオク?」

「うん、過去にそこで起こった出来事を、大地に教えて貰う技」

「凄いや! そんな事出来るの?」

目を輝かせるシリギに、女の子はますます下を向いて首を横に振った。

「うん、アタシ、出来た事ないの。カワセミ様は、訓練すれば出来る…って言ってくれたけれど。見えた事ないの。素質、ないのかも…」

「カワセミ…サマは、出来るんだ?」

「うん、そこがトルイの天幕だったって、突き止めたのカワセミ様だよ」

「えっ?!」

驚くシリギの横に戻って、ユウは焚き火に木切れをほんぽん

放り込んだ。

「五年前…、調べに来たの」

「…何で…?」

シリギの素朴な疑問に、巻き毛の少女は少し遠い目をして答えた。

「カワセミ様ね、トルイが大好きだったの」

「へえ?」

「お父様も、叔父様も、みんな、トルイが好きだった。人間であり、仲間でもあったって」

お祖父様が妖精の仲間だった! シリギの中でトルイの存在が急に大きくなって、ますます彼の事を知りたくなった。

「妖精の信頼の証の名前はキビタキって言ったのよ」

キビタキ……。

シリギは、西の森でカワセミが眉間に影を落として、その名前を口にして怒っていたのを思い出した。あの時自分は、何て言ったんだっけ?」

「カワセミ様はこややって地面に手を付けて、ずっと探ってた…」

ユウの言葉で思考が遮られた。

「でもね、分からなかったの。トルイの最期の理由」

ユゴは燃え上がる焚き火を眺めながら、切なそうに言う。

シリギはくらくらした。あの凄そうなヒトが、とっくに調べに入っていて、そして分からなかった？ そんな事、自分には永遠に突き止められない気がした。

ユゴが顔を上げた。

「だから、あんたなら突き止めてくれるかも…って思ったの」「えっえええっ?! 何で…?!」

ホントに、何で、そう思えるんだ?! 自分は、妖精が見えるだけの、ただの人間なのに?!

「血よ。あんたはトルイの血を分けた子孫なの。トルイの子孫の中で、多分最も彼に近い血を受け継いでいるんだわ」

「血? 血…って、そんな、大事なの?」

「大事だわ。妖精は血で呼び合ったりするもの。人間だって大事にするでしょ」

「それは…でも…」

ただの身内鬮だ。血が伝えるモノについては、あまり考えていない。

戸惑う少年の手を、女の子は取った。

「アタシが手伝う。アタシが教えるから。一緒に、やってみよう」

見上げる目は決意を湛えていた。こんな目に逆らえる訳ない。

「集中するの! 大地に謙虚な気持ちになって、自分も土も同じに感じるの」

翌日、日の出と共にシリギは地べたに這いつくばらされていた。言われるまま、ひんやりする土に両手を付ける。

「…ダメだよ、ユゴ。僕、そういうの、修行も何にもしていないんだよ」

「うん、すぐには出来ない。だから、ちょっとずつ練習してみよう」

ユゴは異常に熱心だった、

ゆうべ地面に頬を付けた時、葡萄酒の盃が見えた話をする、ほら、やっぱり!と、鬼の首でも捕ったように言われて、その日の午前も午後も、飲まず食わずで地べたと睨めっこさせられた。

修行経験もなく、そもそも妖精の資質があるかどうかすら怪しいシリギには、底の抜けた桶で水を汲み続けているような気分だ。助けて貰っているのは確かに自分なんだが、ユゴのこの熱心さは何なんだろう?」

「ひあ〜…」

夕方、ユゴが食料調達に草の馬で飛び立って、ようやく地べ

たから解放されたシリギは、空を見上げて寝転んだ。

「この『地の記憶を読む』以外のやり方はないのかなあ？」

そもそも、ずっと修行しているユウに出来なくて、『凄いヒト』っぽいカワセミサマにも真相は掴めなかったのだ。自分に出来るとは思えない。

第一、彼女は勝手に決めつけているが、僕が知りたかったのって、本当に、ここの地の記憶なんだろうか？

弱気に加えてタベの寝不足も手伝い、仰向けのまま少年はウトウトし始める。そうして地面に意識を落として行った。

.....

また目の前に葡萄酒の盃がある。

それを持つ手の腕輪も爪も、見覚えのない大人の物だ。

盃の中の波打つ、注がれたばかりの葡萄酒。その向こうに、同じ盃を持った一人の男のヒトが立っていた。

…昨日、地霊が作っていたカタチ……オゴテイ王!!

……イクサガミノ、ハタラクヨ、タタエテ……

……ノメバ、イイノカイ、…アニウエ……

違——う——!! 飲んじゃ、ダメ——!!

ヒュウっと身体が引っ張られた。

ビックリ目を大きく見開いたユウが、夕空を背景に目の前に

いる。

「大丈夫？ あんた、目を開いたまま寝てたよ？」

シリギは上半身を起こした。まだ心臓がドクドクいっている。背中は冷や汗でびっしょりだ。

「今、僕が違つ大人のヒトになっていた……」

「……………」

巻き髪の少女は何も口を挟まず、水を器に注いで蒼白の少年に与えた。

「向かいにオゴテイ王がいて、葡萄酒の盃を持っていた。何でか、それに毒が入っている……って、思ったんだ」

「そう……、ね、もう一度、そこへ行けない？」

「い、嫌だっ！」

シリギは、肩に置かれたユウの手を振りほどいた。器が転がって水がこぼれた。

「自分を恨みに思っただけで殺そうとしているヒトが、目の前にいるんだよ！ 昨日の地霊みたいに！ そんな恐ろしい所へ行けなくて?！」

ユウは眉をハの字にして、振りほどかれたままの姿勢で俯いた。

「…………ごめん……なさい…………」

しょんぼりする女の子の目の周りには、隈くまが出来てい

た。タベも寝ないで、ずっとシリギに気を配っていたんだろう。

「ねえ……」

「……」

シリギは努めて落ち着いて、ユコに向き直った。

「どうしてそんなに熱心なの？ 木から落ちこちた君の下敷きになった位の恩で、そこまで熱心になれるなんて、僕、思っていないよ」

「……」

「他に、理由、あるんだろ」

「うん……」

ユコは観念して正直に打ち明けた。

「初めは、本当に、あなたの助けになるだけのつもりだったのよ。でも、目的が定まって……」

シリギは黙ってユコを見据える。

「カワセミ様とここへ来た時の事を、思い出したの。何時間も、何時間も、ここで這いずり回って。『何で、分かってやれないんだ！』『何で気付いてやれなかったんだ！』って……」

「……」

「カワセミ様は予言者なの。仲間の危険を予知して知らせるのが役割だと思ってる。だから殊更、トルイが死んでしまうような災厄を予知出来なかった自分を責めているの」

「……そんな……」

「……そういうヒトなの……」

「ユコその言葉には想いがこもっていた。その想いが、何故かシリギの気持ちを毛羽立てた。」

「それで君は、そのヒトの為に、こんなにも熱心なんだ」

「うん……ごめんなさい……」

「いいよ、別に。謝る事じゃない。目的が一緒なら都合だら」そんなつもりはないのに、険のある言い方になってしまった。ユコは寂しそうな顔をして、薪拾って来る……と呟いて、下の林の方へ行ってしまった。

シリギはちょっと後悔したが、謝りたくなかった。あの子は自分の事を考えてくれて……と、思ったかっただのに……。

夕闇迫ってもユコは戻らなかった。

迎えに行こうか……と、もたもたし始めた時、焚き火の向こうにまだ嫌な気配を感じた。

背筋に嫌な汗が噴き出して、手足の先がじんじん冷たくなって来る。恐る恐る目を上げると、灰色の塊がズン！と、そこにあった。

どうしてこういう勘って当たってしまうんだろう？ うずくまって顔を上げたモノ……昨日の地霊……オゴテイ王！ まだ祓

「はらわれていなかったんだ?!

灰色の地霊はユラリと立ち上がった。

「トルイ……やっと一人になった……」

「ほ、僕……トルイじゃないっ」

「昔からお前の銀の眼が大嫌いだった……。今、俺の手で閉じてやる……」

地霊はいつの間にか、右手に盃を掲げている。

「……やっぱり……?!

灰色のオゴテイ王は無表情で盃を付き出して、シリギに迫る。

少年はまたタベみたいに金縛りだ。

「シリギ!!」

林の方からユコが駆けて来た。助かった……!! しかし何故か

「ユコは離れた所で止まった。

「ユコ……」

「……ダメだわー!」

「えっ?」

「アタシには被えないんだわ。もう、あなたに深く憑いちゃっているのよ! あんたでないと被えない!」

「えええ——っ?!」

地霊は、左右に揺れながらめっくらり迫って来る。

「術で助けるから、剣を抜いて!!」

「ほ、僕、まだ長剣を帯びるの許されていない……」

「なんですってえ?!」

シリギの腰にあるのは、子供騙しの短剣だ。

「王族の子の癖に、長剣べらい持っているなさいよお!!」

「無茶言わないでよ!!」

言っている間に、魔物はすぐ目の前だ。地の底のような暗い眼窩の奥……心臓まで凍りつかされそう……。

「トルイ……お前が嫌いだ……」

「僕、トルイじゃないってば」

シリギは首を横に振りながら後退する。

「逃げてても終わらないわ!」

「こ、こんなのと戦えない……」

「トルイはもっと凄いのと戦ったのよ!」

「僕、トルイじゃない——!!」

シリギは大きくかぶりを振った。

「みんな、みんな、トルイ、トルイって!! 僕は、トルイと違う!!」

「そう……そうよ!! あなたはシリギだよ!!」

キッパリした声がして、いつの間にか、女の子はシリギの真後ろに立っていた。

「剣を高く挙げて!!」

シリギの抜いた短剣に、ユコの両手が緑の槍を重ねる。

「そのまま振り降ろすのよ!!」

「僕は・・・シリギだ——!!」

少年は両手で剣を振り降ろし、魔物は緑の光に貫かれて動きを止めた。

二人は止まって息を飲む。一拍置いて、地霊は頭からとろけて崩れた。

「やった!!」

女の子は立ち戻り、シリギの後ろから抱き付いた。

「あんた凄いい! いきなりで魔物を倒した! 凄いい! 凄いい!」

しかし女の子はシリギの横顔を覗いて表情を止めた。それから、ゆっくり前に回って、自分の袖口で少年の目の下をそおつと拭いた。

自分でも気付かず涙をこぼしていたシリギは、狼狽えて身を引いた。そんな彼の気持ちを察して、女の子も目を伏せた。

「よかった...」

「え?」

「西の森でもそっだったけれど、あんまり『生きる元気』のなにいヒトかかって思ってた。そんな事なくて、よかった...」

「.....」

「ねえ...」

崩れた魔物の塵を見ながら、シリギが囁いた。

「これが、『答え』だとしたら?」

「え...?」

「」はすくには何の事か分からず、シリギの横顔を凝視した。
「どうなるの? 大切なトルイを殺めたのが、その兄王だとい
うのが答えだとしたら...」

少女はその意味が分かって、蒼白になる。

「君のカワセニ様は、どうするの?」

「どうも...しないわ。妖精は人間に...何も、出来ない、もの...」

ただ.....」

ユコは震えながら答える。側にいるシリギにも、その歯の力
チカチ言つのが聞こえる。

「ただ...、王族とは、人間とは...切れる...でしようね...。トル
イが亡くなってからも、切れたような物だったけれど...:~:これ
で、完全に、切れる、でしようね.....」

シリギは立ち上がって、脚を引き摺りながら二三歩離れた。

そうして、背中を向けたまま、続けて聞いた。

「君と、僕も、切れるの?」

「.....」

「ねえ……」

「……………」

長い沈黙が流れて、シリギが呟いた。

「もう一回だ」

「…え…」

「もう一回だけ彼処へ行って確かめる。こんな答え、嫌だ」

振り向いたシリギはビックリした。ユコは大きな瞳を更に涙で膨らませて、決壊寸前だった。

「ア、アタシも、イヤ……」

ユコはそんなに沢山の人間を知っている訳じゃない。でも、とても好きだった人間がいる。人間と切れるという事は、そのヒトとの思い出も封印せねばならない……という事なのだ。

「君のカワセミ様も、違っつて信じているみたいだった。僕が、トルイの存在が王族に利用されるだけの物で、妬まれて殺されたみたいな言い方したら、めっちゃめっちゃ怒っていたから」
焚き火を大きくし、ユコの捕って来た鯛(うづい)を焙りながら、シリギが言った。

「うん、そっだと思っつ。だけど、『君のカワセミ様』って言うの、やめて。あのヒト、アタシのモノじゃな……」

「ああ、はあ、……うん」

嫌味半分で言っていたのが真面目に嫌がられて、シリギは空振りした苛めっ子の気分になった。

「『君の』じゃなければ、既に『誰かのモノ』なんだ」

しつこい下衆げすな苛めっ子だ。

しかし少女は更に大真面目に答えた。

「そう…永遠に、敵わない…。アタシはいつまでも経っても『ただのお子ビちゃん』なの…」

そう来られると、経験値の低いシリギには継ぐ句がなかった。

「ユ、ユコも、なかなか、イケてるのにな」

この程度で精一杯だったが、しんみりしてしまったユコにはそれでも薬になった。

「…ホント…?」

そうして話している内に、二人が同い年なのも判明して、ここでやっと身構えが取れて、お互いの話をする事が出来た。
「父上も…兄達も、母上も…、王族としては立派だけれど、好きになれない、馴染めない。お祖母様という時だけ、人間とい…って気分になるんだ」

「ふうん……」

「気のない返事だね。解り難い?」

「うん、アタシは生まれた時から七つまで、ずっと三人暮らし

だったから」

「三人家族？」

「三人暮らしよ。山の中腹のおうちで、母様とナナと。たまにお父さまが来て、もっとたまに叔父様が来て。それ以外はずっと三人だったから、好きとか馴染めないと分からない。他に比べる物がないもの」

「へえ……」

「今は、蒼の里で大勢に囲まれて暮らしているけれど……、山で一人が残っている母様を、いつも想ってる」

「じゃあ、良い家族なんだ。離れていても想っているなんて」

「そうかな……、そうだね」

「僕も、お祖母様を想おう。お祖父様の事、ちゃんと知らせてあげたい。何も分からないから宙ぶらりんで、一族とも隔たっているんだ。そんなのお祖父様喜ばない」

少女は焚き火に照らされる少年の横顔をじっと見つめた。地霊と対峙した事で、この少年の中に、何かが芽生えた気がする。

「蒼の妖精のヒト達の為にも。本当は、誰も……君だって、人間と切れたくはないんだろう？　しかも大好きなトルイが切っ掛けで」

「ユコは大きく頷ぐ。

「トルイを信じよう。結果はもうあるモノだけれど、それに至

る理由は、必ずある筈だ」

焼けた綱を半分に裂くが、ユコは手を上げて断った。

「血肉は身体に入れない。……術が逃げるから」

シリギは地面に横たわり、地に意識を落とす。何でか、普通に出来る自信があった。少年の側でユコはその手を握る。

「アタシがあんたを護る。だから安心して行って来て」

「凄い自信だね」

「うん……話していて分かったの、気が付いたの」

「ん？」

「トルイの所へ行くには、カワセミ様の術じゃダメだったのよ」

「え……？」

シリギは意識が吸い込まれて、それ以上聞いていられなかった。

「だって、あんたがトルイに分けて貰ったその強い信念で、トルイの所に行くんなら……アタシは、トル……おなじ血を……

…………て……」

………

何度も見た葡萄酒の盃。それに映る銀の眼。そして正面に立つオコテイ王。

「さすが戦神(いくさがみ)！　と言った所か。あの不利な地形

で、よく敵軍の動きが読める物よ」

「運……だよ、兄上」

初めてはつきり聞く、トルイの声。少し高めで澄んだ声。

目の前の王は、盃を持つ手と反対側の手に、豪華な飾り付けの瓶を掲げていた。

「西方の極上酒だ。戦神を讃えて乾杯するのに確保しておいた」
「それは、光栄……」

トルイは手を伸ばして、その瓶を受け取って眺めた。トルイと同化しているシリギの視点も変わる。

二人盃を持ち、立ち上がった。

「戦神の働きを讃えて！」

「飲めばいいのかい、兄上……」

トルイは含みのある言い方をして、ためらいなく盃を口に運んだ。

——?!—— 王の表情が明らかにおかしい。

(飲んじゃダメ！)

シリギの意思は無視され、トルイは面倒くさい事をサッサと済ませたい……という風に、盃の縁に口を付けた。その心が伝わる。乾いた、無表情な心。

カシン!!

王が、自分の盃でトルイの盃を弾き落としていた。二つの盃

が離れた所で転がる。こぼれた葡萄酒が銀の燭台にかかる。酒のかかった部分が、鈍い黒色に変色した。

「迂闊はよせ。お前はモンゴル帝国に必要だ。だが、俺はいつでもお前を殺したいと思っている」

王は立ちすくんでトルイを睨む。何てめんどくさいヒトなんだ……。

「うん、心掛けとくよ、兄上……」

弟は兄に背を向け、とす黒く変色した銀の燭台を持ち上げた。

「あーあ、気に入らだったのに」

「うわっ……このヒトめんどくさいやつ……」。

鼻で笑って王は出て行き、トルイは一人になる。シリギはトルイの視点で物を見ているようだが、何も働きかける事は出来なかった。もっともだ。これはただの地べたの記憶だ。変える事が出来る物ではない。

トルイは盃を拾い上げて隅に放り投げ、寝台にコロリと仰向けになった。

……コロリ……入り口に気配。

しかしトルイは身構えるでもなく、全くの無警戒だ。命を狙われているに於ては、アバウト過ぎやしないか？

入って来たのは、はなだ色の瞳に、蒼い髪の女性だった。純

白の甲冑、背中に白い半透明の羽根。

(…蒼の狼……!!)

「王が……出て来ましたね…」

「うん、いつものやつ」

「……………」

「ビョーキだね、あのED。何とかならない？」

女性は黒い燭台を見つめ、溜め息を付きながら、手を添えた。

黒い部分が拭ったように銀に戻って行く。

「金軍の残ったのは？」

「大将を退けたので、撤退命令は行き渡っていますが、一部動

かない部隊があります」

「引き続き警戒が必要……ってED」か

「監視を続けますか？」

「そだね」

「では…」

女性は羽根を揺らして去りかける。

「ちょっと休んでいけばいいのに」

「大丈夫です。監視なんて、休み半分みたいな物ですから」

不意にトルイは上半身を起こした。

「あのさー」

女性は、入り口で立ち止まって振り返る。全ての所作が昔も

なく静かだ。西の森のあの場所で、密やかに暮らしていた蒼の妖精……。

「はい……」

「うん、……いいや、後で。王都へ戻ってからで」

「いいんですか？」

「うん……」

「では……」

「あ……」

「はい？」

「気を付けて……」

「ええ……」

今度こそ女性は出て行った。多分……、これが、蒼の狼の、息

子との、最後の邂逅……。

トルイは寢台に仰向けに転がっていた。銀の眼は天井を睨ん

だまま何か考え事をしている。シリギの方が息苦しくなっ

た。この後、確実に、何か、起こるんだ。

夜半過ぎた頃、外に気配を感じた。トルイは身を起こした。

今度は狼ではないらしい。

「……トルイ……起きてるか？」

王の声。

「どうしたの？ 兄上？」

王は人目をばかするようにバオに滑り込んで来た。何だか戸惑った様子だが、さっきと違って目の焦点は合っている。

「おかしなモノがある」

「おかしな？」

「明らかに、周囲から浮いている、おかしなモノだ。お前なら、解るか？」

「…分かった、行く」

王は目を丸くした。

「信じるのか？ そんな、簡単に」

トルイは立ち上がって帯剣した。

「兄上の冗談と本気の区別ぐらいは付く。貴方、基本的に嘘の下手なヒトだから」

弟のペースに巻き込まれながら、兄は先に立って案内した。

山沿いの人気がない場所。

「一人になりたくて、夜闇を散歩していたんだ」

「兄上の夢遊癖は昔っからだけれど…王なんだから護衛ぐらい連れて行きなさいよ……わお!!」

岩を越えた所に、その『地割れ』があった。トルイにとって、見るのは初めてじゃない。間違いなく『あの』災厄の歪みだ。

ただ、以前のよりずっとずっと小さい。長さも幅も、小さな笹舟位だ。

「兄上、よく、見えたね」

「普通、見えないのか？」

「うん。国の災厄に関わるからかな？ まあ……さすが、王だ」

何か言いたそうな王の前を通り過ぎて、トルイはオレンジと白に交互に光る裂け目の側に屈み込んだ。

「何なんだ、これ？」

「うん、災厄。俺も見るの、二回目」

「災厄？ どんな？」

「分からない、前のやつは未然に防げたから」

「お前がかな？」

「違うよ」

トルイは隙間の大きい所から、中を覗き込んだ。流れはスムーズに見える。

「……………」

目を凝らして、一ヶ所、やや滞っている箇所を見つけた。まだ小さい。この段階なら自分にも戻せるだろう。

カワセミがあんな事になってから、蒼の里でも対策が練られていた。一度大きい裂け目を無理に塞いだ事で、短いスパンでまた出現する可能性を、大長は予測していた。

歪みを見つけたら小さい内に、魔力の少ない者でも塞げる方法を、大長とツバク口で確立していた。それをトルイも少年時代に教わっていた。

「兄上」

少し考え込んでいたトルイが振り向いた。

「大丈夫だから、陣へ戻っていて」

「何でだ？」

兄は踏ん張る。純粹に好奇心もあるのだろう。

「一応、妖精の力は、ヒトの前で使わないって約束があんの」

「妖精の…チカラ？」

「うん、俺、半分妖精だもん」

トルイはサラッと云った。

「…初耳だぞ？」

「聞かれた事ないから。最も、前王が存命中はトップシークレッツだった」

「何で、今更…」

「今は貴方が王でしょ」

「……………」

兄は立ち戻りていこう。

「ね、陣へ戻ってよ。それが嫌なら、せめて後ろを向いてて…」

「俺はヒトではない！ 王だ！」

トルイは目を丸くしたが、すぐ苦笑いになった。そして王を手招きした。

「そっちらから、見えるかな？ あれ、あすこ…」

弟が指差す方向を、兄は素直に覗き込む。

「ちょっと流れが引つ掛かっているでしょ」

「あの、二股に分かれた所か？」

「そう！ 見えてんじゃん！」

兄が顔を上げると、弟の顔がすぐ目の前にあった。初めてこんなに近くで見る、銀の眼……。

「今日から貴方達の弟になるんです」

母に引き合わされた歩き始めたばかりの子供は、明らかに『普通』ではなかった。

血のような真っ赤な髪、動物みたいに光る銀の眼、大き過ぎる八重歯…。色々と人間離れた父だが、一体何をやらかしたんだ?! と、幼いオコテイですら思った。

一回り離れた二人の兄は尚更だ。

「母上では、この子が…正妻の貴方の子でもない、この子が、末子となり王を継ぐのですか?!」

モンゴルの遊牧民族の間では、一族の長期繁栄の為に、なる

べく若い子供に家督を譲る習慣がある。

「いえ、この子には殆ど何も継がせなくていいから、王族にだけ加える…という王の条件でした」

「あのヒトの事だ！ いつ、気紛れを起こさないとも限らない！ こんな、バケモノみたいな…！」

「ジョチ！…王の御子ですよ！」

ヴォルテ妃は気丈だった。色んな事を受け流さなくては、あの人並み外れた王の正妃なんて務まらないだろう。

赤毛の子供は、後宮の奥でひっそりと育てられた。オコテイも滅多に会わず、その存在も気にならなくなっていた。

それが、十二、三歳になった頃、いきなり何が吹っ切れたのか、被っていた兜を脱いで、平気で赤毛を曝して闊歩するようになった。そしてみるみる、父や家臣達の信頼を集める存在になって行ったのだ。

「兄上…？」

大嫌いな銀の眼が、真ん前で覗き込んでいる。

「あ、ああ…、それで、あれをどうするんだ？」

王は目を反らせて聞いた。

「うん…、引っ掛かりがあるから口が開いちゃったんだ。風の浄化の力で、ちゃんと流れるようにすれば、自然に閉じる」

「お前に出来るのか？」

「一応習ったけれど…あまり魔力を要さない分、ちよいと複雑な術なんだな。まあ、出来るでしょ」

「そんな、不確かか…！」

「だって、放つといたらどんどん大きくなって、大きな災厄に繋がるんだよ、これ」

王は困った顔をして、ちよっとキョロキョロした。

「あのヒトは、どうなんだ？」

「へ？」

「たまに、お前の、側に見える、羽根のある女性…妖精なんだろう？」

トルイは目を見開いて、口をバクバクした。

「兄上…!! みっ…見えてたの?! いつから?!」

弟があまりにびっくりするので、兄は逆に戸惑った。

「たまにだ。フイと視線を移した時とか。父上が亡くなってからだな」

「ああ…。」

狼は亡きテムジンと共に在る。息子に見えるようになって不思議じゃないだろう…。

「あのヒトは、理詰め術はテンでダメ。感覚のヒトだから。まだ、俺の方がマシ」

「そういう物なのか？」

「うん」

トルイは立ち上がったて手順な棒を探し、地面に何やら描き出した。王は所在なさげにそれを眺める。

「あの女性(ト)……羽根の……」

「んん？」

「綺麗だな」

「ふん、サンキユ、俺の母親」

「はあ?! 若過ぎないか?!」

「妖精は人間の何倍も生きるとの」

「そうか、しかし、側で見ると不思議な物だな。子供の頃見ていたのは、遠目で、緑の馬に乗って……」

オ「テイは、弟が手を止めて、この世の物ではないモノを見るような目をして突っ立っているのに気付いた。

「どうした? もう出来上がりののか?」

「あ……あ……兄上……」

「んん？」

「今、何て……んんん？」

「出来上がりなのかって……」

「その前!!」

トルイは棒を放り出し、すかずかと王に歩み寄って両肩を掴んだ。

「子供の頃、何を見ていたって?!」

オ「テイは戸惑った。何がこいつのツボだったんだろう?

「緑のしなやかな馬で飛ぶ、青い髪の妖精だよ。本当に小さい頃だ。見たことすら忘れていたな……」

「それ……! それ、誰にも、言わなかったのっ?!」

弟は兄の肩を強く掴んでガシガシと揺さぶった。この弟が自分に対してこんなに感情をあらわにした事はない。オ「テイは怒り……より、不思議に嬉しさが湧いた。

「あ、ああ、兄達にかなり馬鹿にされて……幼心に傷付いて、二度と口にしなかった……んん……んん……?」

弟は兄の身体を掴んだまま、ズルズルと足元にしゃがみこんでしまった。

「おい、どうした?」

兄は同じようにしゃがんで、弟の肩に触れた。目を上げた弟の銀の瞳は、いつもものふてぶてしい獣の輝きはなく、仔犬のように震えて潤んでいた。

「兄上……それ、父上に言っていたら……大嫌いな俺に、逢わずに、済んだのに……」

トルイは立ち上がった、黙って魔方陣の続きを描き出した。

オコテイは今の言葉の意味を聞き直しはしなかった。大昔に何らかの『掛けちがえ』があった…という事だ。時間は戻せない。過去の事は追求しても始まらないのだろう。

「前の災厄は、この何百倍もあった。草原全体…王都を壊滅させる力を十分持っていたって」

話題を変えるように、トルイが喋った。

「それを防いだっていいのか？」

「完全には防げなかったけれど、最初の内ですぐ止められた。ほら、昔、西の山で部落が幾つか崩れたでしょ」

「…ああ…」

覚えている。村は埋まったが、こいつが住民を避難させて人死が出なかったんで、復興も早かった。

「あの時からお前の英雄伝説が始まったんだってな」

「英雄なもんか…」

トルイは立ち止まって一つ所で全体を見渡した。地面には複雑な模様が出来つつある。

「本物の英雄は、その犠牲になってくれた一人の蒼の妖精だ。

もっともアイツはそんな言葉、大っ嫌いだったけれど。アイツは…こんな魔方陣に頼らなくても、素である巨大な歪みを止めた…本当に、凄い、奴…だった」

少し荒れ気味にまた地面を引っ掻き始めた弟に、兄はそっと聞いた。

「亡くなったのか…？」

「まあ…それに近い…」

人知無き場所で、妖精が命を掛けて土地を救っていた。人の王の知る所とは、いったいどれだけの範囲なんだろう…？

「王と国民は、その妖精殿に感謝を示すべきだろう」

地面を引っ掻いていた手を止めて、トルイは振り向いた。

「彼(か)の事を人民に知らしめるべきだろう。王室は未々その英雄に感謝し、敬い奉るべきだろう」

「兄上、それ、人間の発想」

赤毛の弟は苦笑いしながら作業に戻った。

「違うのか？」

兄は素直に聞き返した。

「妖精は外界に何も求めない。基本的に欲がない。有るのは、どんな山よりも高い誇りだけ」

「難しい連中なんだな」

王は素直に感想を述べる。

この弟とこんなに会話が続いたのは初めてだ。もっとも会話らしい会話をしたのが初めてかもしれない。

「はは…そうかもな。でも、慣れれば簡単なんだ。連中、『撰

理』に殉じているだけだから」

「摂理？」

「うん…、こんだけ色んな事が出来て、古い知恵がたっぷりあって、人間の何倍も生きて…。そんな連中が欲を持ったら、どうなると思う？」

「……たちまち、世界に君臨するな…」

王は、離れた岩に座り込み、腰を据えてこの弟と話している。

「うん、その後はより色んな物を欲しがって、潰し合って、結局むなし破滅だけが残る」

「……………」

「だからね、この位が丁度良いんだって。人間が大勢で分担しながらこの世の業を背負ってくれて、蒼の妖精はこの世の流れを見据えて、ちょっと助けたりする程度で。バランスが取れている…、それが摂理に沿って事だって」

トルイは魔方陣を描き終えて、中の小石や落ち枝を外に放り出し始めた。

「子供の頃、いっぺん妖精の里へ叩き込まれてさ、その辺、徹底的に教わった」

「だからお前も王位の継承を拒むのか？」

王も立ち上がった、トルイの地味な作業を手伝い始めた。

「うん、そう。義母(はは)は君この約束もあるし…。何より、半

分妖精の俺が人間のトップに立つのは…違うでしょ、摂理に反する」

「そうか。妖精と同じで欲がないのか？ と思ったが…」

「欲は、あるよ」

トルイは準備終わって、棒をガランと放り投げた。

「ソルカに幸せでいて欲しい。未永く蜜柑の木の元で、子供達と平和に暮らさせてやりたい。これは欲だろ」

王はちょっと止まって、トルイをマジマジと見た。

「欲…というのとは、少し違う気がするな」

「ふうん…じゃあ人間って、その他にどんな望みを持つっていうんだ？ さあ兄上、準備出来た。離れてくれ。後でまた話の続きをしよう」

オコデイは素直に退いた。剣を抜き呪文を唱えながら、一つの魔法文字に力を与える弟を、随分遠くに眺める。

こいつの事、全く解っていないかった。切っ掛けさえあれば、こんなに簡単だったなんて。今晩話せて本当に良かった。こいつと一緒に、この先、王様稼業もそこそこ楽しいかもしれない…。

「兄上——!!」

弟の呼び声で我に返った。地割れの上方の岩影に、ぼうっと

赤黒く光る影が、五、六個動いて近付いて来る。

「曲者か?!」

オゴテイは剣を抜いて駆け寄った。

「俺、手が離せない! そいつら魔方阵に入れないで!」

「よし、引き受けた!」

影は、動きは鈍いが邪気をはらんでいる。オゴテイの前に迫ると、いきなり立ち上がって、王の側近の一人になった。

「な……お前……?!」

「全く我が君は情けなや……。今回も弟御におんぶに抱っこ……」

王は剣を構えて凍り付く。

「地霊だ!!」

トルイが魔方阵を支えながら背中越しに叫んだ。

「姿も言葉もまやかした!! ヒトの負の心が大好物なんだ!!」

強い意思があれば斬れる!!」

「そ……そうか……!」

オゴテイは剣を振り下ろす。真っ二つになった影は、しかし今度は二人の家臣になった。

「我が王君は名ばかりのお飾り……」

「先代の足元にも及ばぬ……」

数体の灰色の家臣に囲まれ、オゴテイは剣を振り上げたまま

真っ青で止まってしまった。

「う、うるさい、うるさい……!! ……貴様ら……」

冷たい灰色の手が伸びて、オゴテイの身体に掛かる。心まで凍り付かされそうだ。

瞬間、翡翠の閃光が走った。地霊は退き、兄の前にトルイが

剣を構えて立ち塞がっていた。

「しっかりとしろ! こいつら、兄上の心の澱を掬って言葉に出しているだけだ! 強い心があれば負けない!」

途端、トルイの前の地霊が姿を変えた。それはオゴテイを含め三人の兄とヴォルテ妃だった。

「バケモノ……」

「王室に潜り込んだバケモノ……」

「黙れ!!」

トルイはキパッとそれらを一刀両断に取った。

「お、俺はそこまで思っていないぞ!」

背中合わせでオゴテイが叫ぶ。

「分かってる……。これは俺の……心の澱だ……」

間髪入れず、トルイの前に立ちはだかったのは……前王テムシンだった。

「……!!」

さすがに二人、一瞬、躊躇する。

「お前は役に立ってくれた……」

「……………」

「お前の母親も役に立ってくれた……俺になびいた妖精の娘がいたのは幸運だった……」

「……………」

「お前を得る為だけに妖精の娘を抱いた……人間が妖精を愛するなんてあり得ない……俺が愛しているのは人間のヴォルテダケだ……」

「……………」

灰色の魔物は真つ二つになった。剣を降り下ろしたのは兄王だった。

「しっかりとしろ！ まやかしだって言ったのはお前だろ！ 嘘

つばちだ！ 愛情無い両親からお前みたいなのが生まれるものかー！」

トルイは銀の眼を柔らかく細めた。

「ありがと……兄貴……」

家臣の形の最後の地霊をオゴデイが斬り捨てて、トルイは慌てて魔方阵に取って返した。

「あっ……あ・あ・あ……」

しかし魔方阵はすつと消え、地割れは不気味に唸り出した。

「まずい！ 失敗した」

「どつなるんだ?!」

「良くはならない事だけは確かだ！ 力付くで止める！ 兄上、退いてー！」

トルイはだんだんに口を開ける地割れに駆け寄って、両手を上に掲げた。やった事ないけど、やるしかない！

「ままよ!!」

大地と風からカー杯、浄化の力を引き集める。両手に翡翠色の槍が出来上がる。

オゴデイは、風を巻き起こして槍を掲げる弟を、後方で緊張して見つめていた。

「……………!!」

トルイの手から投げ下ろされた槍は、流れの歪みに一直線に入った。

「……………」

弟は裂け目を見下ろしている。オゴデイの所からは地割れの中は見えない。

やがて、唸りが小さくなってゆき、地割れが閉じ始めた。

「やった……のか？ 成功したのか?!」

地割れが完全に閉じるのに目を奪われていて、弟が崩折れたのに気付くのが、一拍遅れた。

の専任場所とする…。くだらない、意味のない決め事だ。あんな廃虚…」

「くだらなくない!!」

この弱い子供から出たと思えない強い声だった。

「それ、聞けてよかった。とても大切な事だ。僕はそれに従います。お祖母様の所へ行きませう」

踵を返して駆け出す子供を、父と兄達は呆気に取られて見送った。

蜜柑の花散る庭園の入り口に、葦毛が顔を出す。

「まあ、シリギ殿—」

祖母が揺り椅子から立ち上がったって駆け寄る。

「無事ですか？ 怪我はないですか？ ああ、よかった。おかえりなさい…」

祖母はたくさん喋る。普段ほとんど話し相手がいないからだと。う。

「もう、いいんですか？ 道は切り開けたのですか？」

「はい、お祖母様。その報告と…後一つ、お願いがあつて参りました」

「何かしら？」

「僕、ここで暮らしたい！ お祖母様と一緒に！」

祖母は戸惑ったが、少年の両親が特に反対もしなかったと聞いて、その子の頭を抱いて受け入れた。

トルイの事はゆっくり、少しずつ話せばいい。

多分あの後オゴデイ王は、トルイの遺志を出来る限り守ったのだろう。即ち、敬われも語られもせず、英雄にもならない…、平凡に病死。トルイも、それでいい…と、笑つたろう。

そうして兄は、ちょっとだけ嫌な噂を被ってくれた。この弟を疎うと…んじ続けた自分に対する贖罪(しよくさい)。

オゴデイの遺志は大切にしたいが、祖母の為に、あの夜二人がした兄弟の会話を、少しだけ語って聞かせるのを許して貰おう。

蜜柑の木に風が立ち、庭園に白い花が舞う。

「お祖母様、迎えが来ました。少し出掛けて来ます」

シリギはお茶のカップを置いて立ち上がった。

「まあ……」

祖母も立ち上がり、少女のようなワクワクした目になって、庭園を見回す。

「では、今、ここに、蒼の妖精の方が？」

「はい」

と答えるシリギの後ろには、大長とユユ…そしてその父親の

ツバクロが、下馬してソルカ妃に敬意を示している。

「蒼の狼殿の兄君と、トルイお祖父様の……妹と、その父君です」

ソルカはちよつとの時間をかけて呑み込んだ。

「あ、ああ……そう、そうなの……」

妃は懐かしさを込めた目でそちらへ手を伸ばした。

「あの方は、今、新しい家族の元で、幸せなのですね。ああ、よかった……、本当によかったです……」

ユウが進み出て、妃の手が少女の頬に触る。

「暖かいわ……。この子をどうか、お願いします。迷わぬよう、導いてやって下さい」

ユウは大長と父を交互に見、二人が頷うなずいてから、ソルカの手を握った。

「あっ、ちよつと待って、……待っていて下さいね」

ソルカは母屋に駆け去り、すぐ何かを抱えて戻って来た。

「シリギ、これを蒼の狼殿」

清しい香りの小さな瓶。祖母自慢の、蜜柑の蜂蜜漬けだ。

「はい、お祖母様、必ず」

風が巻いてシリギも見えなくなり、気配がなくなった。祖母はワクワクした足取りで茸毛の鼻面を撫でに行った。

「私達平凡なモノは、大人しくお留守番でもしていきましょうか」
茸毛はふるると頷いた。

「蜜柑の蜂蜜漬け、食べますか？」

地べたの記憶から戻った時、荒れ地に横たわったまま、シリギは動けなかった。本当にこれ以上はない、という位疲れ果て、指先も動かせなかったのだ。

ユウがあれこれ介抱するが、頭を動かすと吐いてしまい、二人して不安に押し潰されそうだった。

天の助けのように来たのは、たまたま通り掛けに様子を見に寄ったツバクロだった。

「お父さまあゝ！」

心細さに駆け寄るユウを傍らに抱き止めて、仰向けに転がっているシリギを見て、心配より先に目を丸くして、こんな台詞が出てきた。

「……こいつあ！ カワセミが、ご執心になる訳だ！」

ツバクロが少年の額に手を当てて治療を施している間、ユウは傍らで黙って居た。見聞きした事はシリギの体験で、自分は追従しただけだ。語られるのは彼の口からであるべき……と、心得ていたのだろう。

「里へ運ぼう。大長の力が必要だ」

ツバクロは少年をマントでくるんで馬に押し上げた。ツバクロの馬はヤンチャだが、こういう時はわきままえている。空を滑るように、少年と主を里へと運んで行った。

ユウは葦毛を連れて、自分の馬と二頭で地上を走って、大分遅れて里へ戻った。

執務室ではナナが一人留守を預かっていた。

「シリギは?!」

「カワセミ長のパオ。あそこが、生命の力が流れているから、治癒に一番いいんだって。大長と三人の長も詰めてる」

すぐに行こうとするユウを、ナナは引き止めた。

「立ち入り厳禁!」

「なんで?! アタシはずっとシリギと一緒にだったのに?!」

「大人の中に子供が入って行くと、大人は大人でいなきゃならなくなる。そんな余裕ない場合って、あるだろう?」

「……………」

ユウは黙った。いつだってナナは冷静で正しい。

「ユウ、よれよれじゃないか。家に戻って休んでろよ。フィフイ母さんが、食事用意してくれてるぞ」

「……うん……」

立ち去りかける妹に、書類の選別をしながら兄はぼつんと言った。

「ユウはよくやったよ……」

妹は立ち止まって振り向いた。

「ナナは……、それ、何やってるの?」

「んー? 長の仕事の依頼の分類。これやっとくと、後でノスリ長が楽になる」

「……アタシでも、手伝える?」

「……じゃあ、そっちの終わった奴、日付順に並べて」

「うん」

書類の山がきれいに分割される頃、三人の長が入って来た。

三人とも、微妙に伏せ目がちに目が赤い。

「ボク、寝る……後は宜しく……………」

カワセミは長椅子にうつ伏せに倒れ込んで、そのまま寝息を立て出した。いつもながら鮮やかなオヤスミ五秒。

ノスリは大机の向こうに座り、ツバクロは長椅子の肘掛けに腰掛けた。

ナナは素早く後片付けをして、では失礼しますと、戸口から消えた。本当に自分の立ち位置を確立している。カワセミに毛布を掛けていたユウも見習おうと、慌てて出口に向かった。

「ユウ」

ツバクロが呼び止める。

「シリギと一緒に『見た』んだな」

「はい…、シリギは、みんな話したの？」

「ああ、おおむね…」

ノスリは何も言わず、鼻をグシユグシユいわせている。

「シリギ、大丈夫？」

「強い術に身をさらして身体がびっくりしたんだ。大丈夫、ちゃんと回復するよ」

「よかった…」

「そしたら一度、風出流山(かぜいする)やまに連れて行く」

「うん、そうだね」

ユウが出て行って、二人、暫く無言だった。シリギの話で新たに浮かび上がった事実が、心に爪を立てていた。

里奥のパオ…、カワセミのベッドに横たえられたシリギの側には大長がいて、ずっと額に手を当てている。

「あの…、僕、大丈夫です。大分楽になりました。大才さんも、もう休んで下さい」

「いいですよ。貴方は何も心配しなくていいんです。明日には元気になるですよ…」

大長の声は優しくだったが、表情は険しく、目は違う所を見据えていた。

「あの……」

「はい？」

「僕も修行したら、術とか使えるようになるんじゃないか？」

大長はピクリと揺れてから、やはり優しい声で、しかしきっぱりと言った。

「蒼の里では、もう人間に術の手解きはしない事にするんですよ。自然に使えるようになってしまった場合は…封印します」

「…なんで…ですか？」

「トルイが突然こと切れてしまった理由…」

大長は砂を噛むように続けた。

「今回解りました。人間は魔法を使うようには出来ていなかったんです。術を使う度に、少しずつ命を削っていたのです」

「……………」

「五年前、里にいた人間の女性も、術を使った少し後…途切れるように逝ってしまいました。我々は…間違いを犯してしまっただんです。大切な者達を……」

大長は、両手で自分の顔を覆って、ベッドにもたれて息を吐いた。

「トルイは…間違ったとか、思っていないですよ、きっと」

シリギが天幕を眺めながら呟き、大長は顔を上げる。

「例え、命を縮めると知っていても、トルイは術を使い続けた

と思います。お陰で、大切なヒト達の役に立てた。ソルカお祖母様を救う事が出来た。…一生の仲間が出来た…」

大長は細いカンテラの明かりのもと、身じろぎもせずしりぎを見つめる。

「だから、僕もこうして、生まれて来たんです。絶対、間違いないですよ！」

大長は黙って少年の手を握った。

再び執務室の二人。

「キヒタキは…ある程度、分かっていたんだ、多分…」

ツバクロが呟く。

「だから、こいつにも予知出来なかったんだ。思わぬ災厄は予知出来るけれど、自らが招くモノは違う。ナナとユユが自ら術の力を相殺し合ってドツポに陥るみたいだ」

傍らの長椅子で熟睡するカワセミに、すり落ちた毛布を掛け直してやりながら、ツバクロは静かに言った。

水色の妖精は、大長が駆け付けても、ずっとシリギに張り付いて、自分の全部を与えんばかりの勢いで、治癒の術を施していた。羽根を持つてからはペース配分出来るようになっていたのだが、こんなに消耗した相棒を見るのは久し振りだ。

「ツバクロも、もう休めよ」

「ノスリこそ」

「俺はいい。久し振りに、こいつに付いていてやる」

「じゃあ、僕も…」

すうっと多忙な日々が続いていて、三人揃ったこんな時間は久し振りだ。あいつが作ってくれたのかも知れない。

ソルカ妃の庭園を出て、シリギはツバクロの馬に乗せて買って風出流山に向かい、大長とユユは里へと戻った。

「いいんですか、ユユ。闘牙の馬と一緒に山へ連れて行ってもいいんですよ」

「いいの…。アタシ一人母様に逢いに行ってもナナに悪いし、それに…」

巻き髪の少女は俯うつむいて呟く。

「子供がいると、大人は大人でいなぎやいけないから…」

大長はちょっと目を丸くした。

子供がね…大人に、大人でいなくてもいい…って許してあげるのは…それはもう、貴方が子供を卒業出来ているって事ですよ…。可愛い姪っ子に心でそう囁きかけながら、大長は馬を返して里へ向かう。子供の成長って本当に早い。

そしてその子供等(ら)に、足踏みしている自分達は、助けられっ放しだ…。

多分、草の馬に乗るのは最初で最後だろうからと、ツバクロはちよっとサービスしてあげたが、アクロバット飛行を喜ぶ子供なんて、里でもユコだけだという事を忘れていた。山の神殿に到着する頃には、シリギは目を回して気絶寸前だった。

だから蒼の狼が自分を一目見てどんなに驚いたか…どんなに胸を踊らせたか…なんて、分からなかった。

「本当に…何てまあ…」

「瓜二つだろ、あいつに……」

神殿の暖炉の前で、シリギは温かい飲み物を買って生き返った。目の前に、地の記憶で見た羽根の女性が、目を細めて微笑んでいる。記憶の中よりも、たおやかで柔らかい感じがした。

「僕…そんなに、似ているんですか?」

「ええ…、髪と目の色が違うのを差し引いても…」

ちよっとした動作や表情まで、あの小さなトルイにそっくりな少年を見て、蒼の狼は目をしばたいた。

シリギは、西の森でカワセミが怒りに身を震わせていた訳が分かった。トルイと同じ顔であんな情けない事を口走ったんじゃない、そりゃ槍のひとつも向けたくなるだろう。事情を知らないこっちはいい迷惑だったけれど…。

「お祖母様はそんな事、一言も…」

「ソルカ妃は戦場を体験して大人の表情になったトルイしか知りませんか。何年かしたら、お祖母様もビックリさせる事になるでしょう」

ツバクロは神殿の外で待っていた。

あの夜、トルイが母親に言いかけて後回しにした台詞…。トルイと同化していたシリギには聞こえていた。しかし、蒼の里で皆に聞かれても、口にしなかった。

「それ、どうしても、蒼の狼さんに直接言いたいんです」

そういう訳で、約半世紀振りにこの神殿に人間が来訪する運びとなった。奇しくも前回の来訪者の孫にあたる。

外で二頭の馬の戯れるのを眺めていたツバクロの所へ、蒼の狼が来た。

「もういいの?」

「はい、中でお茶でも…」

「うん、…で、なんだったの?」

「他愛もない事でした」

「ふうん? 教えられない事?」

「…でもないですけど…」

「じゃあ、教えてよ」

「……………」

「…ダメ…?」

「……前半分だけなら……」

「?? うん、それでいいよ」

「『いい加減、子離れして』…」

「はっ」

「そこまで、です」

「はあっ」

それから、暖炉の前で、トルイとオコテイ王の話をやつくり聞いた。海の底の静かな貝の砂の覆いはもう必要ない。久方ぶりに暖かな太陽を見上げる気分。愛する息子は真っ直ぐ、最後まで生き続けた。

帰り際に、シリギは緋色の布に包まれた細長い包みを渡された。開いてみると…束に赤い石の付いた見事な長剣だった。

「トルイが青年時代に持っていた物です」

「そ、そんなの、受け取れません!」

「さあ…? 貴方がどうでも、剣が貴方の元へ行って、大切なモノを護る為、働きたいらしいですよ」

蒼の狼にサラリと言われて、シリギは謹んで受け取らざるを得なかった。

清しい顔で見送る妻を振り返り、ツバクロは淡栗毛の少年に話しかける。

「有難うな。彼女、どれだけ救われたか」

「いいえ、僕じゃないです。トルイと…後、ユユが励ましてくれたお陰です。でも、本当にこの剣…僕なんかに? ナナに行くべきなのでしょ」

「気にするな。ナナには人間の剣は合わないし、第一剣が君を選んだんだよ」

ツバクロは懐かしそうにトルイの剣を見つめた。この剣をトルイから取り上げちまって、奴が狼にビンタ喰らう羽目になったっけ…。あの頃の自分は、狼は何かっていうとビンタして来るおっかない女性だと思っていた。

「あの…な」

「はい?」

「トルイの、狼への最後の言葉…、僕にも、チョコッと教えてくれない?」

「…でも、狼さんは貴方に言わなかったんでしょ?」

「内緒にするからさ、ね」

「……………」

「じゃ、半分! 後ろ半分だけでいいから」

「はあ…、後ろ半分なら…」



「うん、うん！」

「『アイツノ、トコへ、イッチャエヨ』です」

「……………あのヤロウ……!!」

ツバクロが馬に湯を入れたので、シリギはまた怖い思いをする羽目になった。

旧王都の西の森。

陽当たりの良いソルカ妃の庭園より、こちらの蜜柑の木の方が遅くに結実する。今年最後の蜜柑をまぎに、少年は森へ足を踏み入れる。

「あれ？」

「あら…」

何ヶ月振りかに会う、蒼い巻き髪の女の子。木の上で、脱いだ上着一杯にくるまれた蜜柑を抱えている。

その上の梢(こすえ)に、有翼の水色の妖精が、鷹のように立っていた。

「ここには…」

何となく苦手意識をあらわにする少年に、無表情に「警ぐれで、カワセミは梢を蹴って少年の斜め横に降り立った。

「ユコ、全部は採るな。木守りの実は残して置くんだ」

「はあ…」

「採っちゃおうの？」

「持って帰るのは、キミだ…」

「……………」

カワセミは相変わらぬ、こちらがリアクションに困る棒読み台詞でサラッと呟いた。

「あの蜂蜜漬は絶品だ…」

そういえば、狼に渡した蜜柑の蜂蜜漬は、蒼の里へ戻るツバクロにもお裾分けされていた。

「まだ宜しくと、ソルカ殿に伝えておいてくれ」

「は……………はい…」

樹上で蜜柑採りに専念しているユコを確認して、カワセミは静かに少年に問うた。

「で、分かったか？」

「…何を、ですか…？」

「自分が、何の為に生まれて来たか…だ。一番最初に聞いたただ…」

「あ、ああ…」

シリギはちよっと唾を飲み込んで、顎を上げて答えた。

「僕、ちゃんと意味を持って生まれて来たんです。おこがましければ…」

カワセミは水色の深い瞳で少年を見つめながら、黙って続き

を聞いている。

「トルイが心ならずも残してしまったちよっとずつの曇りを拭いて…、いろんなヒトを、ちよっとづつ幸せにする為に、この世に来たのかなあ…と。これからも、多分」

本当におこがましい。まだ怒らせるかなあ…と思ったが、カワセミは以外にも静かに頷いた。

「ああ……そうだな…」

カワセミはもう一度ユコがこちらを向いていないのを確認してから、ポケットから何かを取り出した。小鳥の卵よりも少し細長い、小さな銀に光る石。

「これを持っていろ」

「…これは…」

「握って強く思えば、何処に居てもボクに伝わる」

「……？」

シリギは、角度によって透明に見える不思議な石と、カワセミの顔を見比べて、キョトンとした。

「キミが、『本来の力』を使いたい、と思ったら、ボクを呼べ。

封印を解いてやる」

「え？ えっ、…え……？」

カワセミは更にシリギに顔を近づけて囁いた。

「キミは、多分、そこその力を持っている。ナチュラルに地の記憶に入れた位だから。大長は、眠っている間にキミに封印を施した。それは正しい。誰だってキミに命を縮めて欲しくない」

「え…、僕？ そうなの？」

いきなりな話でシリギは驚いた。

「だけれど…、キミがその能力を持って生まれたのには意味がある。キミがその意味を見つけて、必要だと思ったら、ボクを呼べ。ボクの責任に置いて、封印を解いてやる」

シリギは少しの間石をじっと見つめてから、カワセミを見た。

「いいの？ 貴方、大長さんに背く事に…」

「大長は…ボクにとっての絶対だ。でも、キミの意志は、別の次元で絶対だ」

シリギは暫くこの祖父の親友を見つめた。

「分かりました、…ありがとうございます」

石をギュッと握ってから、大切に懐にしまった。

「カワセミ様——」

樹上のユコが叫んでいる。

「もう一杯。重くて持てないわ」

「ああ、偉いぞユコ。降りて来い」

カワセミは何事もなかったように、また無表情になった。

ユコは他愛なくお喋りしながら、シリギの持参した袋に蜜柑を丁寧に移す。

「早くしちやおうや」

「だって…、シリギとはあんまりお気軽に逢えないもん。忘れられたら嫌だもん」

「忘れないよ」

シリギは目を細めて、自分と同じ色の瞳を見つめ返した。

「人生で、ずっと一緒にいても記憶に残らない者もいる。ほんのちよっとしかいなかったのに、一生残る者もいる。たとえ天が落っこちて来たって、君の事は忘れようがないよ、ユコ」

巻き毛の娘はちよっと目を丸くして、はにかみながらまた蜜柑を掴んで移し始めた。

「腕が…ちよっと太くなったな」

いつの間に、真後ろからカワセミに腕を掴まれて、少年は飛び上がった。

「は、はい、剣を…習い始めたんです。本格的に」

「ほお…?」

「トルイの剣を帯びるのに耻じないよう。あと、『生きのびる元氣』を得る為…です」

「…うん、そうか…」

水色の妖精は静かに頷き、少女は蜜柑を詰め終えて、しっかりと目を見つめて少年に差し出した。

蜜柑の木の清しい香りが風に舞う。

風出流山の神殿。

蒼の狼は、地平に掛かる三日目を眺めていた。季節が替わり、星も替わる。今宵は早くに月が沈んで、冬の星座が鮮やかに浮かび出した。

「あの子…そう、この星のようだよ……」

月の光に隠れていたけれど、本当はちゃんと其処にあって、一生懸命照らしてくれていた。

「トルイが、月の子……シリギは、星の子……ね……」

星はこれからも数奇な運命を辿るが、いつも月に隠されながらも、懸命に皆を照らそうとするのに、変わりはない

くおしまい

二〇〇九・十一・九